研究ノート

# 元亨版『和語灯録』と『西方指南抄』の比較対照②

市川定敬

〔抄録〕

金沢文庫蔵の『三部経大意』は『和語灯録』所収の「三部経釈」と同じ内容を持ちながら、至誠心釈については他の法然遺文には見られない特異な記述を有する文献である。この特異な至誠心釈について、『和語灯録』編纂者である了慧道光による削除の可能性が先行研究によって指摘されている。本研究ノートは、最古の『和語灯録』版本であり、了慧の存命中に開版されている元亨版『和語灯録』と、これよりも成立の古い『西方指南抄』を比較することによって、間接的にではあるが、了慧による編集傾向を概観し、その可能性について考察する資料とするものである。

**キーワード**　元亨版『和語灯録』、『西方指南抄』、『三部経大意』

本研究ノートは、金沢文庫蔵「三部経大意」の至誠心釈が、了恵による削除である可能性を検討するために、元亨版『和語灯録』（一三二一年）とそれよりも古い成立である『西方指南抄』（一二五六～一二五七年）とを比較したものである。両書に並行する文献は次の通りである。（〔　〕内は『指南抄』のタイトル）

- 「三心義」〔「十七条法語」のうちの一法語〕
- 「念仏大意」〔「念仏大意」〕
- 「九条殿下の北政所へ進する御返事」〔「九条殿北政所御返事」〕
- 「鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事」〔「鎌倉二位禅尼に答ふる書」〕
- 「要義問答」〔「要義問答」〕
- 「大胡太郎実秀へつかはす御返事」〔「大胡太郎実秀に答ふる書」〕
- 「大胡太郎実秀か妻室のもとへつかはす御返事」〔「大胡太郎実秀の妻に答ふる書」〕
- 「熊谷の入道へつかはす御返事」〔「熊谷へ遣はす書（九月十六

日付）」〕

●「津戸の三郎入道へつかはす御返事」〔「津戸の三郎に答ふる書」〕

●「黒田の聖人へつかはす御文」〔「黒田の聖へ遣はす書」〕

●「越中光明房へつかはす御文」〔「光明房に答ふる書」〕

●「正如房へつかはす御文」〔「正如房へ遣はす書」〕

●「十二の問答」〔「或人念仏之不審聖人に奉問次第」〕

本研究ノートはこれら全てを比較した。今回は「大胡太郎実秀へつかはす御返事」以降を掲載する。

〈凡例〉

・元亨版『和語灯録』は『龍大善本叢書十五　黒谷上人語灯録（和語）』（同朋舎出版）を用い改行、句読点を付した。『指南抄』は『親鸞聖人真蹟集成』第五・六巻（法蔵館）を用いた。

・元亨版『和語灯録』を基とし、その上から『西方指南抄』の異同を記した。

・元亨版に存在し、『指南抄』に存在しない記述は二重線の取消線で記した。

・元亨版には存在せず、『指南抄』に存在する記述は太ゴチで記した。したがって、了恵による削除の可能性のある箇所は、太ゴチで記される箇所である。

・本研究ノートの目的はあくまでも、上述の了恵による削除の可能性を検討するものであるので、成立状況等を考察する上では看過すべきではない、音便変化による記述の違い（念仏せん→念仏せむ）や、文意が変わらない範囲での記述の異同（阿弥陀ほとけ→阿弥陀仏）について厳密には指摘していない。

**大胡太郎實秀へつかはす御返事〔大胡太郎実秀に答ふる書〕**

**上野のくにの住人おほこの太郎と申もの、京へまかりのぼりたるついてに法然聖人にあひたてまつりて、念仏のしさいとひたてまつりて、本国へくたりて念仏をつとむるに、ある人申ていはく、いかなる罪をつくるとも念仏を申せは往生す、一向専修なるへしといふとも、ときときは法華経をもよみたてまつり、また念仏申さむもなにかはくるしからむと申けれは、まことにさるかたもありとて法然聖人の御もとへ消息にてこのよしをいかかと申たりける御返事、かくのことし。件の太郎はこのすすめによりて、めおとこともに往生してけり。**

**聖人の御返事**

さきの便に申さしあふ事候て、**御ふみをたにみとき候さりしかは、**御返事こまかに申さす候き。さためて不審に**おほつかなく**おほしめし候らんと思給**おそれおもふたまへ**候。さてはたつねおほせられ候し事ともは、御文なんとにて、たやすく申ひらきかたき事にて候**くへきことにても候はす**。あはれ**まことに**京にひさしく御逗留候し時、**よし水の坊にて**こまかに御沙汰候ましかは**ありせは**よく候ひなまし。大方は念佛して往生すと申事はかり**をは**わつかにうけ給はりて候。わか心一つにふかく信したるはかりにてこそ候へとも、人まてつはひらかに申きかせなんとする程の**み身**にて**は**候はねは、まして**いり**たちいりたる

事ともの不審なんと、御文にて申ひらくへしともおほへ候はねとも、わつかに見**うけたまはり**およひ**て**候はん程の事を、ははかりまいらせて、**すへて**ともかくも御返事**を**申候はさ**さ**らん事のおそれにすく**ちおしく**候へは、心のおよ**ふひ候はむ**程**のこと**は、かたのことく申候はん**さむ**と存し**おもひ**候也。

まつ三心具足して往生すと申候事は、ま事にその名目はかりをうちきく時は**おり**は、いかなる心を申やらんと事々しくおほへ候ひぬへけれとも、善導の御心にては、心えやすき事にて候也。かならすしも**もし**ならひ沙汰せさらん无智の人や、さとりなからん女人なんとの**は**え具せぬ程の心はへにては候はぬ也。たたまめやかに往生せんとおもひて念佛申さん人は、自然に具足しぬへき心にて候物を。そのゆへは三心と申すは、觀无量壽經にとかれて候やうは、もし衆生ありてかのくににむまれんとねかはんものは、三種の心をおこしてすなはち往生すへし。御等**なに**をか三とする。一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心也。この三心を具**せ**るものは、かならすかのくににむまるととかれたり。

しかるに善導和尚の御心によらは、はしめは**の**至誠心といふは眞實の心也。眞實といふはいはく内**に**はむなしくして、外を**には**かさる心のなきを申也。すなはち觀經疏に**観無量寿経を**釋していはく**のたまはく**、外には賢善精進の相を現して、内には虚假をいたく事をえされ**なかれ**といへり。この釋の心は、内**に**はおろかにして、外にはかしこき人とおもはれんとふるまひ、内には惡をつくり**て**、外には善人のよしをしめし、内には懈怠の心を懷き**てにして**、外には精進の相を現するを、眞實ならぬ心とは申也。外も内も**内にも外にもたたあり**の**ある**ままにてかさる心のなきを、至誠心とは**なつけたる**にこそ候めれ。

二には深心といふは、すなはちこれ深く信する心也。何事をふかく信するそといふに、まことのもろもろの煩惱を具足し**て**、おほくのつみをつくりて、餘の善根なんとなからん凡夫、あみたほとけの大悲本**の**願をあふきて、そのほとけの大悲の名號をとなへて、もしは百年にても、もしは四五十年にても、もしは十二十年にても、乃至一二年にてもあれ、すへて往生せんとおもひはしめたらん時よりこれ、最後臨終の時にいたるまて懈怠せす**退せさらむ**、もしは七日一日十聲一聲にても、おほくもすくなくも、稱名念佛の人は決定して往生すへしと信して、乃至一念もうたかふ心**事**なきを深心とは申也。

しかるにもろもろの往生をねかふ人**も**、本願の名號を**は**たもちなから、なを内に妄念のおこる**をにも**おそれ、外に餘善のすくなきによりても、ひとへにわか身をかろしめて往生を不定におもはふは、すてに**仏の**本願をうたかふ也。されは善導ははるかに未來の行者のこのうたかひをのこさん事をかかみて、その疑心**うたかひ**をのそきて、決定の心をすすめんかために、煩惱を具足して罪業**つみ**をつくり**て**、善根すくなく智解**さとり**なからん凡夫、十聲一聲までの念佛によりて決定して往生すへきことはりを、くはしくこ**まかに**釋し**て**おしへ給へる**のたまへる**也。たとひおほくのほとけ、空の中に充滿**みちみ**ちて、光をはなち**御**舌をのへて、造罪の**つみをつくれる**凡夫、念佛して往生すといふ事はひか事なり、信すへからすとの給ふとも、それによりて一念も

おとろきうたがふ心あるへからす。

　そのゆへは阿彌陀ほとけ、いまた佛になり給はさりしむかし、もし我佛になりたらん時**に**、十方の衆生、わか名號を十たびとなへ、十こゑもとなへむ。となふる事かみ百年よりしも十聲一聲までにせんにはこの**もの**、もしわかくにに生まれすといはは、われほとけにならしとちかひ給ひたりしに、その願むなしからすして、**すてに**ほとけになりたすてにひさしくなり給へり。知るへし。その名號をとなへむ人はかならす往生すへしといふ事を。又釋迦ほとけこの娑婆世界にいて給ひて、一切衆生のためにかの**阿**彌陀**仏**の本願をとき、念佛往生をすすめ給へり。又六方恒沙の諸佛**は**、おのおの廣長の舌をいたして、釋迦の念佛して往生すとき給ふは決定也。もろもろの衆生ふかく信じてすこしもうたがふ心あるへからすと、爾許のほとけたちの一佛ものこらす一味同心に證誠し給へり。すでに阿彌陀ほとけはその願を立給ふ。釋迦ほとけは、その願のむなしからさる事をときすすめ給ふ。六方恒沙の諸佛はその説の眞實なる事を**その説を**證誠し給へり。このほかにいつれのほとけの、又これらの諸佛にたかひて、凡夫念佛して往生せすとはの給ふへきそといふことはりをもて、おほくのほとけ現しての給ふとも、それにおとろきて、さては念佛往生かなふまじきかと信心をやふり難心**うたかひ**を**おこすいたす事ある**へからす。いはんや菩薩**仏**たちのの給はんをや。いはんや羅漢辟支**仏**等をやと**こまこまと**釋し給ひて候也。いかにいはんや近來の凡夫のいひさまたけんをや。いかにめてたき人と申すとも、善導和尚にまさりたてまつりて、往生の道をしりたらん事もありかたく候。

　善導は又たたの凡夫にはあらす、すなはち阿彌陀佛の化身也。かのほとけわか本願をひろめて、あまねく十切**ひろく**衆生にしらしめて決定して往生させ料に、かりそめに凡夫の人とむまれて、善導和尚といはれ給ふ**とは申す**也。ふはその教は**申せは**佛説にてこそ候へ。いかにいはんや垂迹のかたにても、現身に念佛三昧をえて、まのあたり淨土の莊嚴を**も**見、佛にむかひたてまつりて、たたちにほとけのおしへをうけ給はりての給へる詞共也。本地をおもふにも、垂迹をたつぬるにも、かたかたあふいて信すへ**しへきおしえなり**。されは**しかれは**たれもたれも煩惱のこきうすきを**うすくこきをも**かへりみす、罪障のかろきおもきをも沙汰せす、たた口に南無阿彌陀佛ととなへむ**えは**こゑにつきて決定往生のおもひをなすへし。その決定の心をやかて**すなわち**深心とはなつくる也。その深心**信心**を具しぬれは、決定して往生する也。詮するところは、**たた**とにもかくにも深心念佛して往生すといふ事をふかく信じてうたがはぬを、深心とはなつけて候なり。

　三に**は**廻向發願心といふ**申**は、これ又別の心に**て**は候はす。わか所修の行業を一向に極樂に廻向して往生をねがふ心也。

　かくのことき**のく**三心を具**足**してかならす往生すへし。この心ヽ**もひとへに**かけぬれは往生せすと善導は釋し給へる也。たとひ眞實**まこと**の心ありてうゑをかさらすとも、ほとけの本願をうたがはすに深心かけたる念佛**こころ**也。たとひ難心**うたがふこころ**なくとも、**ほかうへ**をかさりて内にま事の**におもふ**心なくは、至誠心かけたる心なるへし。たとひ**また**この二**の**心を具してかさ**り**心も**なく**難心**うたがふこころ**もなくとも、極樂にむまれん**往生せむ**とおもふ**ねがふ**心な

くは、廻向發願心かけぬ**すくなかる**へし。**また**三心を心えとわかつ時**おり**は、かくのごとく別々**に**なる様なれとも、詮するところは、眞實の心をおこしてふかく本願を信して往生をねか**はむ**心を、三心具足の心とは申**へき**也。ま事にこれほとの心**を**たにも具足せすしては、いかか往生ほとの大事をはとけ給**ふ候**へきや。この心**は**申せは又やすき事にて候也**そかし**。これをかやうに心えしらねはとて、又**三心**具足せぬ心にては候はぬ也。その名をたにもしらぬものも、この心をはそな**へ**つへく候。又よくよくしりたらん人のなかにも、そのままに具せぬも候ひぬへき心**は**にて候也。されはこそいふ甲斐なき人なりぬものともの中よりも、たたひゝ**ひとへ**に念佛申すはかりにて**は**往生したりといふ事は、むかしより申つたへたる事にて候へ。それゝはみなしらねとも、三心を具したる人にてありけりと心えゝ**う**る事にて候也。又としころ念佛申たる人の臨終のわ**るき**事の候は、さきに申つるやうに、うゑはかりをかさりて、たうとき念佛者**な**と人にいはれんとのみ思ひて、したにはふかく本願をも信せす、まめやかに往生をもねかはぬ人にてこそは候らめと**こそは**心えられ候也**へ**。されはこの三心を具せ**ぬ**ゆへに臨終もわ**るく**、往生も**え**せぬ事にて**とは申**候也とこそ**しめ**すへき也。

かく申候へは、さては往生は大事の事にこそ**あむなれ**とおほしめす事、ゆめゆめ候ましき也。一定往生すへ**きそ**と思ひとらぬ心を、やかて深心かけて往生せぬ心とは申候へは、いよいよ一定の往生とこそおほしめすへき事にて候へ。まめやかに往生の心さしありて、彌陀の本願をうたかはすして念佛を申さん人は、臨終のわ**るき**事は大方は候ましき也。そのゆへは、ほとけの來迎し給ふ事は、もとより行者の臨終正念のためにて候也。それを心えぬ人は、みなわか臨終正念にて念佛申たらん時**おり**に、ほとけはむかへ給ふへき也とのみ心えて候は、佛の願をも信せす、經の文をも心えぬ人にて候也。そのゆへは稱讃淨土經に**いはく**は、ほとけ慈悲をもて加へ助けて、心をしてみたらしめ給はすととかれて候**へは也**、たたの時によくよく申をきたる念佛によりて、臨終にかならすほとけは來迎し給ふ**へ**。ほとけの來迎し**きたり現し**給**ふへる**を見たてまつりて、衆生正念に**は**住すと申す義にて**つたえて**候也。しかるにさきの念佛を**は**むなしくおもひなして、よしなき臨終正念を**お**のみいのる人なんとの候は、ゆゆしき僻亂にいりたる事にて候也。されはほとけの本願を信せん人は、かねて臨終をうたかふ心あるへからすとこそ**は**おほへ候へ。たた當時**より**申さん念佛を**は**、いよいよも心を至して申**へ**きにて候**候へき**。いつかはほとけの本願にも、臨終の時念佛申たらん人をのみ迎へんとはたて給ひて候。臨終の念佛にて往生**を**すと申事は、曲此往生をもねかはす、念佛をも申さすしてひと**へ**につみをのみつくりたる惡人の、すてに死なんとする時**に**はしめて善知識のすすめにあひて、念佛して往生すとこそ觀經にもとかれて候へ。もとよりの行者**は**、臨終の沙汰をはあなかちにすへき様**は**も候はぬ也。佛の來迎一定ならは、臨終の正念**も**は又一定とおほしめすへき也。この大意をもて**御こころをえて**よくよく御心をととめて、心えさせ給ふへ**く**候**きことにて候なり**。

又罪をつくりたる人たにも念佛して往生す、まして法華經なんとゝゝよみて**また**念佛申さんは、な**ほと**かは**くゝ**し**あし**かるへきと人々の

申候らん事は、京邊にもさやうに申候人々おほく候へは、まことにさそ候らん。**こ**れは餘**の**宗の心にてこそ**は**候ゆ**はめ**。よしあしをさためを申す**候**へき**こと**に候はす。僻事と申さ**は候はは**、おそれあるかた**も**おほく候。たたし淨土宗の心、善導の御釋には、往生の行は**を**大きにわかちて二つとす。一には正行、二には雜行也。はしめは**の**正行といふは、**そ**れに**また**あまたの行あり。はしめに讀誦**の**正行といふは、これは**大**无量壽經、觀**無量寿**經、阿彌陀經等の三部經を讀誦する**よむ**也。つきに觀察正行といふは、これはかのくに**極楽**の依正二報のありさまを觀する也。つきに禮拜正行といふは、これは**も**阿彌陀ほとけを禮拜する也。つきに稱名正行といふは、**これは**南無阿彌陀佛ととなふる也。つきに讃嘆供養正行といふは、これは阿彌陀佛を讃嘆**供養**したてまつる也。これをさして五種の正行となつく。讃嘆と供養とを二つの行とする時は**にわかつには**六種の正行とも申也。

**また**この正行に付てふさねて二ゆ**種**とす。一には一心にもはら彌陀の名號をとなへたてまつりて、立居起臥晝夜**夜昼**にわするる事なく、念々にすてさる物を、これを正定の業となつく。かのほとけの本願に順する**よる**かゆへにと申て、念佛をもてまさしく**き**さためたる往生の業に**に**立てて、もし禮誦等によるをは、なつけて助業とすと申て、念佛のほかの禮拜や讀誦や**観察や**讃嘆供養なんとをは、かの念佛**者**をたすくる業と申て候也。

さてこの正定**の**業と助業とをのそきて、そのほかのもろもろの業**諸行**をはみな雜行となつく。布施持戒忍辱精進等の六度萬行も、法華經をもよみ、眞言をもおこなひ、かくのことくのもろもろの行**諸行**をは、みなこととことく雜行となつく。さきの正行を修するをは專修の行者といふ、のちの雜行を修するをは雜修の行者と申て候也。この二行の得失を判するに、さきの正行を修するには、心つねにかのくにに親近して憶念ひまなし。のちの雜行を行するには心つねに間斷す。廻向してむまるる事をうへしといへとも、すへて疎雜の行となつくといひて、極樂に**は**うとき行といへり**たてたり**。又專修のものは十人は十人なからむまれ、百人は百人なからむまる。なにをもてのゆへに。外の雜縁なくして**なし**正念をうるかゆへに。彌陀の本願とあひ叶ふ**相応する**かゆへに。釋迦のおしへにたがはさる**したかふ**かゆへに。**恒沙の諸仏のみことにしたかふかゆえに**。雜行**修**のものは百人か中に一二人むまれ、千人か中に四五人むまる。なにをもてのゆへに。雜縁亂動してす正念をうしなふかゆへに。彌陀の本願に**に**相應せさるかゆへに。釋迦のおしへにしたがはさるかゆへに。**諸仏のみことにしたがはさるかゆへに**。係**繋**念相續せさるかゆへに。憶念**想**間斷するかゆへに。**名利と相応するかゆへに**。みつからも往生の業をさへ他の往生をもさふるか**自障障他するか**ゆへに、**このみて雜縁ちかつきて往生の正行さふるかゆへに**、なんと釋せられて候めれは、善導和尚をふかく信して淨土宗にいらん人は、一向に正行を修すへしと申す事にてこそ候へ。

そのうゑは**に**善導のおしへをそむきて、餘**の**行をくわへん**修せむ**と思はん人は、おのおのならひたる様ともこそ候らめ。それをよしあしとはいかか申候へき。善導の御心にてすすめ給へる行ともをおきなから、すすめ給はぬ**さる**行を、すこしにてもくわふへき様なしと申事にてはそ候へ**なり**。すすめ給へ**ひつ**る正行はかり**を**たにもなを物うき身

にて、いまたすすめ給はぬ雑行を加えん事は、ま事しからぬかたも候そかし。又つみをつくりたる人たにも念佛して往生すれは、まして善なれは、法華經なんとをよまんはなにかくるしからんなんと申候らんこそ、无下にけきたなくおほへ候へ。往生をもたすけ候はこそはいみしくも候はめ。さまたけになりならぬはかりを、いみしき事とにてくわへおこなはん事は、なにかは詮にて候へき。されは悪をはされは佛の御心にこのつみつくれとやはすすめさせ給ふ。かまへてととめよとこそはいましめ給へとも、凡夫のならひ、當時のまよとひにひかれて、悪をつくるはちからおよはぬ事にてこそ候へ。ま事に悪をつくる人の様に、しかるへくは經もをよみたく、餘の行おもくわへたからん事は、ちからおよはす候。たたし法華經なんとをよまん事を、十七書はなりとも一言も悪をつくらん事にいひなくらへて、それもくるしからねは、ましてこれはもなんと申すらん事候はむこそ、不便の事にて候へ。ふかき御のりもあしく心うる人にあひぬれは、返りて物ならすきこへ候事こそ、あさましくおはへ候へ。これをかやうに申候へおは、餘行の人々は腹たつ事にて候に、御心一つに心えて、ひろくちらさせ給ましく候。あらぬさとりの人々のともかくも申候はん事をは、耳にきいれさせ給はて、たた一筋に善導の御すすめにしたかひて、いますこしも一定往生する念佛の數遍かすを申されんあはむとおほしめすへき事にてく候也。たとひ往生のさわりとこそならすとも、不定の往生とはきこへて候めれは、一定往生の正行を修すへきし。衍のいとまをいれて、不定の往生の業をくわへん事は、耳うは損にては候はすや。よくよく心えさせ給ふへきこころうへき事にて候也。たたしかく申候へは、雑難行をくわへん人は、なかく往生すましなんと申事にては候はす。いかさまにも餘の行の人なりとも、すへて人をくたし人をそしる事は、ゆゆしきとかおもき事にて候也。よくよく御つつしみ候て、雑行の人なれはとて、あなつる御心の候ましく候也。よかれあしかれ、人のうゑのよしあし善悪をおもひいれぬか吉き事にて候也。

又心さし本よりこころさしこの門にありて、進みぬへからん進むへからん人をはこしらへすすめさせ給ふへく候。さとりたかひて、あらぬさまならん人なんとに論しあはせ給ふ事は、ゆめゆめあるましき事にて候なり。よくよくならひしり給ひたる聖りたちたにも、さやうの事をはつつしみておはしましあひて候そ。まして殿原なんとの御身にては、一定僻事にて候はんするに候。たた御身一つに、まつよくよく往生をねかひて、念佛をもはけませ給ひて、位たかきく往生をとけして、いそき娑婆に返りきたりて人をはもみちひかせ給へむとおほしめすへく候。かやうにくはしくこまかにかきつけて申候事もへとも、返々ははかりおもふ事にてひて候也。あなかしこあなかしこ。御披露候ましく候。御らむしこころえさせたまひてのちには、とくとくひきやらせたまふへく候。あなかしこあなかしこ。

三月十四日　　源空

**大胡の太郎實秀か妻室のもとへつかはす御返事〔大胡太郎実秀の妻に答ふる書〕**

御文こまかにうけ給はり候ぬ。まはるかなる程に念佛の事きこし

めさんかために、わさと御つかひ**を**あけさせ給ひて候御念佛の御心さしの程、返々**も**あはれに候。

さて**は**たつねおほせられて候念佛の事は、往生極樂のためにはいつれの行なりといふとも、念佛にすきたる事は候はぬ也。そのゆへは念佛はこれ彌陀の本願の行なるかゆへ也。

本願といふは、阿彌陀ほとけ**仏の**いまたほとけになり**らせ**給はさりしむかし、法藏菩薩と申ししいにしへ、ほとけの國土をきよめ衆生を成就せんかために、世自在王如來と申しほとけの御まえにして、四十八の大願をおこし給ひしその中に、一切衆生の往生のために、一つの願をおこし給へり、これを念佛往生の本願と申す也。すなはち无量壽經の上卷にいはく、設我得佛　十方衆生　至心信樂欲生我國　乃至十念　若不生者不取正覺〈已上云云〉。善導和尚この願を釋してゆ給はく云、若我成佛　十方衆生　稱我名號下至十聲　若不生者不取正覺　彼佛今現在世成佛　當知　本誓重願不虛　衆生稱念必得往生〈已上〉。

念佛といふは佛の法身を憶念するにもあらす、佛の相好を觀念するにもあらす。たた心をいたして**ひとつにして**、もはら阿彌陀ほとけ**仏**の名號を稱念する、これを念佛とは申也。かるかゆへに稱我名號とはいふ也。

念佛のほかの一切の行は、これ彌陀の本願にあらさるかゆへに、たとひめてたき行なりといふとも、念佛にはおよはさる也**す**。おほかたそのくににむまれんとおもはんものは、そのほとけのちかひにしたかふへき也。されは彌陀の淨土にむまれんとおもはん物は、彌陀の誓願にしたかふへき也。本願の念佛と、本願にあらさる餘行と、さらにたくらふへからす。かるかゆへに往生極樂のためには、念佛の行にすきたる事は候はぬ也**す**と申す也。往生にあらさる道には、餘行又おゆおゆつかさとれるかたあり。しかるに衆生の生死をはなるるみち、ほとけのおしへさままやうやうにおほく候へとも、このころの人の**生死をはなれ**三界をいでつる生死をはなるるみちは、たた極樂に往生し候はかり也。このむね聖教のおほきなることわり也。次に極樂に往生するに、その行さままやうやうにおほく候へとも、われらか往生せん事、念佛にあらすはかなひかたく候也。そのゆへは念佛はこれほとけの本願なるかゆへに、願力にすかりて往生する事はやすし。されは詮するところは、極樂にあらすは生死をはなるへからす、念佛にあらすは極樂へむまるへからさる物也。ふかくこのむねを信せさせ給ひて、一すちに極樂をねかひ、一すちに念佛**を**して、このたひかならす生死をはなれんとおほしめすへき也。

又一一の願のおはりに、若不爾者不取正覺**もししからすは正覺をとらし**とちかひ給へり。しかるに阿彌陀ほとけ**仏**佛**ほとけ**になり給ひてよりこのかた、すてに十劫をへ給へり。まさにしるへし。誓願むなしからす。みなことことく成就し給へる也。その中に念佛往生の願、ひとりむなしかるへからす。しかれは衆生**の**稱念する物、一人もむなしからす。みなかならす往生する事をう。もししからすは、たれかほとけになり給へる事を信すへきや。三寶滅盡の時なりといへとも、一念すれはなを往生す。五逆重罪**深重**の人なりといえとも、十念すれは往生す。いかにいはんや三寶の世にむまれて、五逆をつくらさるわれ

ら、彌陀の名號をとなえんに、往生うたがふへからす。いまこの願にあへる事は、ま事にこれおほろけの縁にあらす。よくよくよろこひおほしめすへし。ナムアミダ又あふといふへとも、もし信せすされはあはさるかことし。いまふかくこの願を信せさせ給へり。往生うたがひおほしめすへからす。かならすかならすふた心なく、よくよく御念佛候ひて、このたひ生死をはなれ極樂にむまれさせ給ふへし。

又觀无量壽經にいはく、一一光明遍照十方世界　念佛衆生攝取不捨〈已上〉。これは彌陀の光明たた念佛の衆生をてらして、餘の一切の行人をはてらさすといふ也。たたし餘の行をしても極樂をねかはは、ほとけのひかりてらして、攝取し給ふへし。なんそいかかたた念佛のものはかりをえらひてててらし給ふへるや。善導和尚釋しての給はく、彌陀身色如金山　相好光明照十方　唯有念佛蒙光攝　當知本願最爲強〈已上〉。念佛はこれ彌陀の本願の行なるかゆへに、成佛の光明返りてつよく本地の誓願をてらし給ふ也。餘行はこれ本願にあらさるかゆへに、彌陀の光明きらひててらし給はさる也。いま極樂をもとめん人は、本願の念佛を行して、攝取のひかりにてらされんとおほしめすへし。これにつけても、念佛の大切に候。よくよく申させ給ふへし。

又釋迦如來この經の中に、定散のもろもろの行をときおはりてのちに、まさしく阿難に付囑し給時には、かみにとくところの散善の三福業、定善の十三觀をは付囑せすして、たた念佛の一行を付囑し給へり。經にいはく、佛告阿難　汝好持是語　持是語者　即是持无量壽佛名〈已上〉。善導和尚この文を釋しての給はく、從佛告阿難汝好持是語已下　正明付囑彌陀名號　流通於遐代　上來雖説定散兩門之益　望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名〈已上〉。これはの定散のもろもろの行は彌陀の本願にあらす。かるかゆへに釋迦如來の往生の行を付囑し給ふに、餘の定善散善をは付囑せすして、念佛はこれ彌陀の本願なるかゆへに、まさしくえらひて本願の行を付囑し給へる也。いま釋迦のおしへにしたがひて往生をもとめんむる物、付囑の念佛を修して釋尊迦の御心にかなふへし。これにつけても、又よくよく御念佛候て、ほとけの付囑にかなはせ給ふへし。

又六方恒沙の諸佛、御舌をのへて、三千大千世界におほひて、もはらたた彌陀の名號をとなへて往生すといふは、これ眞實なりと證誠し給ふ也。これ又念佛は彌陀の本願なるかゆへに、六方恒沙の諸佛、これを證誠し給ふ也。餘の行は本願にあらさるかゆへに、六方恒沙の諸佛も證誠し給はさる也す。これにつけても、又よくよく御念佛せさせ給ひて候へし、弥陀の本願、釈迦の付属、六方の証誠諸佛の護念をふかくかうふらせ給ふへし。彌陀の本願、釋尊の付囑、六方の諸仏の護念、一一にむなしからす。このゆへに念佛の行は諸行にはすくれたる也。

又善導和尚はこれ彌陀の化身也。淨土の祖師おほしといへとも、たたひとへに善導による。往生の行おほしといへとも、おほきにわかちて二とし給へり。一には專修、いはゆる念佛也。二には雜修なり、いはゆる一切のもろもろの行也。上にいふところの定散等これ也。往生禮讃に云く、若能如上念念相續畢命爲期者　十即十生　百即百生‖何以故‖无外雜緣‖得正念故‖與佛本願相應故‖不違教故‖隨順佛語故　若欲捨專修雜行者‖百時希得十二‖千時希得五三‖何以故‖由雜緣亂

動失正念故＝與佛本願不相應故＝與教相違故＝不順佛語故＝係念不相續故＝憶想間斷故〈文〉。これは**と云へり**。専修と雑行との得失なり。得といふは往生する事をう**るといふ**。いはく、念佛するものは**すなわち**十人はすなはち十人なから往生し、百人はすなはち百人なから往生すといふ、これ也。失といふはいはく、往生の益をうしなへる也。雑修のものは百人か中にまれに一二人往生する事をえて、その餘**ほか**はむまれす**生せす**。千人か中にまれに五十三五人むまれて、その餘は又むまれす。専修のものの**ゆへは**みなむまるる事をうるは、なん**に**のゆへそ**と**。阿彌陀ほとけ**仏**の本願に相應せるかゆへ也。釋迦如來のおしへに隨順せるかゆへ也。雑業のもの**のは**むまるる事**の**すくなきは、なんのゆへそ**と**。彌陀の本願にたかへるかゆへ也。釋迦のおしへにしたかはさるかゆへ也。念佛して浄土をもとむるものは、二尊の御心にふかくかなへり。雑を修**を**して浄土をもとむるものは、二佛の御心にそむけり。善導和尚、二行の得失を判せる事、これのみにあらす。觀經の疏と申すふみの中に、おほくの得失をあけたり。しけきかゆへにいたさす。これをもてしり**ぬる**へし。

おほよそこの念佛は、そしる物は地獄におちて、五劫苦をうくる事きわまりなし。信する物は浄土にむまれて、永劫樂**たのしみ**をうくる事きわまりなし。なをなをいよいよ信心をふかくしてふた心なく念佛せさせ給ふへし。くはしき事は御文にはつくしかたく候。この御つかひ申候へし。

正月廿八日　　源空

〈わたくしにいはく、この御文は正治元年己未、御つかひは蓮上房尊覺なり。〉

## 熊谷の入道へつかはす御返事〔熊谷へ遣はす書（九月十六日付）〕

御文くはしくうけ給はり候ぬ。**又**か様にまめやかに大事におほしめし候ぬ、返々ありかたく候。ま事にこのたひかまへて往生しなんとおほしめしきるへく候。うけかたき人身すてにうけたり、あひかたき念佛往生の法門にあひたり、娑婆をいとふ心あり、極樂をねかふ心おこりたり。彌陀の本願ふかし、往生はたなこころ**たた御こころ**にあるたひ也。ゆめゆめ御念佛おこたらす、決定往生のよしを存せさせ給ふへく候。何事もととめ候ぬ。

九月十六日　　源空

## 津戸の三郎入道へつかはす御返事〔津戸の三郎に答ふる書〕

御文くはしくうけ給はり候ぬ。又たつねおほせ**ぬ**る**たひ**て候事ともおほやうしるし申候。

＝熊谷入道津戸三郎は无智のものなれはこそ、但念佛をはすすめたれ、有智の人にはかならすしも念佛にはかきるへからすと申すよし、きこへて候らん。きわめたるひか事にて候。そのゆへは、念佛の行はもとより有智无智にかきらす、彌陀のむかしちかひ給ひし本願も、あまねく一切衆生のため也。无智のためには念佛を願し、有智のためには餘のふかき行を願し給ふ**たまへる**事なし。十方衆生の御**ため**にひろく有智无智、有罪无罪、善人惡人、持戒破戒、闗患**たふきもいやしき**

も、男も女も、もしはほとけの仏在世の衆生、もしはほとけの仏滅後のちのこれ近来の衆生、もしは釋迦の末法萬年ののち、三寶みなうせてのおはり時の衆生までも、みなこもれりたる也。又善導和尚の彌陀の化身として、專修念佛をすすめ給へるも、ひろく一切衆生のためにすすめて、无智の人にのみものにかきる事は候はす。ひろき彌陀の本願をたのみ、あまねき善導のすすめをひろめん物、いかてか无智の人にかきりて、有智の人をへたてんや。もししからは彌陀の本願にもそむき、善導の御心にもかなふへからす。されはこの邊にまうてきて、往生のみちをとひたつね候人には、有智无智を論せす、みな念佛の行はかりを申候也。

しかるに虚言を構えて、さやうに念佛を申ととめんとする物は、このさきの世に念佛三昧、淨土の法門をきかす、のちの後世に又三悪道に返るへきものはしかるへくして、さやうの事をはたくみ申候事にて候也。そのよし聖教にみなみえて候也。

見有修行起瞋毒　方便破壞競生怨
如此生盲闡提輩　毀滅頓教永沈淪
超過大地微塵劫　未可得離三途身

と申したる也。この文の心は、淨土をねかひ念佛を行する物を見てはいかりをおこし毒心をふかくふうみて、はかり事をめくらし様様の方便をなして、念佛の行をやふりあらそひてあたをなし、これをととめんとする也。かくのことき人は、むまれてよりこのかた、佛法の眼しゐて、ほとけのたねをうしなへる闡提のともから也。この彌陀の名號をとなへて、なかき生死をたちまちにきりて、常住の極樂に往生すといふ。頓教の御のり法をそしりほろぼして、このつみによりて、なかく三悪道にしつむといへる也。かくのことくきの人は、大地微塵劫をすくとも、なかくむなしく三悪道の身をはなるる事をうへからすといへる也。

されはさやうに虚言妄語をたくみて申候らん人は、返りてあはれむへき物也。さほとのものの申さんによりて、念佛にうたかひをなし、不審をおこさん物は、いふにたらぬさる程の事にてこそは候はめ。おほかた彌陀に縁あさく往生に時いたらぬ物は、きけとも信せす、おもはふ行するをみては、はらをたていかりをふくうみて、さまたけんとする事にて候なり。その心をえて、いかに人申すし候とも、御心はかりはゆるかせ給ふへからす。あなかちに信せさらんは、佛なをちからおよひ給ふまし。いかにいはんや凡夫はちからおよふましき事也。かかる不信の衆生のために、慈悲をおこして利益せんと思はんふにつけても、とく極樂へまいりて、さとりをひらきて生死に返りて、誹謗不信の物をもわたして、一切衆生をあまねく利益せんと思ふへき事にて候也。このよしを御心えて、おはしますへし。

一、一家の人々の善願に結縁助成せん事、この條左右におよひ候はす。もともしかるへき事にく候。念佛の行をさまたくる事をこそ、專修の行にはは制したる事にて候へ。人々のあるいは堂をもつくり、ほとけをもつくり、經をもかき、僧をも供養せんには、ちからをくはへ縁をむすはんか、念佛をさまたけ、專修をさうるほとの事はは候ましきはは。

**一、この世のいのりに仏にも神にも申さむ事は、そもくるしみ候ま**

し。**後世の往生、念仏のほかにあらす行をするこそ、念仏をさまたくれは、あしき事にて候へ。この世ためにする事は往生のためにては候はねは、仏神のいのりさらにくるしかるましく候也。**

一、念佛を申させ給はんには、心をつねにかけて、口にわすれすとなふるかめてたき事にては候也。念佛の行は、もとより行住坐臥時處諸縁をきらはぬさる行にて候へは、たとひ身もきたなく口もきたなくとも、心をきよくしてわすれす申させ給はん事は、返々神妙に候。ひまなくさやうに申させ給はんこそ、返々ありかたくめてたく候へ。いかならんところ、いかなあらむ時なりとも、わすれす申させ給はは、往生の業にはかならすなり候はんする也。その心なかはらん人にはそのよしを御こころえておなしこころならむ人には、おしへさせ給ふへし。いかなられる時にも申されさらんをこそ、ねうして申さはやとおもふひ候へきに、申されんをねうして申させ給はぬ事は、いかてか候へき。ゆめゆめ候まし。たたいかなるおりはもきらはす申させ給ふへし。あなかしこ、あなかしこ。

一、御仏、おほせにしたかひて開眼してくたしまいらせ候。阿弥陀の三尊つくりまいらせさせたまひて候なる、返返神妙に候。いかさまにも仏像をつくりまいらせたるは、めてたき功徳にて候也。

一、いま一いふへき事のあるとおほせられて候は、なに事にか候らむ。なむ条ははかりか候へき。おほせ候へし。

一、念佛の行あなかちに信せさられる人に論しあひ、又あらぬ行ことさとりの人にむかひて、いたくしゐておほせらるる事候ましく候。異解学異學解の人を見えては、これを恭敬してかなしめ、あなつる事なかれと、申たる事にて候也。されはおなし同心に極樂をねかひ、念佛を申さん人には、たとひ塵刹のほかの人なりとも、同行のおもひをなし、一佛淨土にむまれんとおもふへき事にて候也。阿彌陀佛に縁なくて、極樂淨土にちきりすくなく候はん人の、信もおこらす、ねかはしくもなく候はんには、ちからおよはす。たた心にまかせて、いかなられるおこなひ行をもして、後生たすかりて、三惡道をはなるへきる事を、人の心にしたかひて、すすめ給ふ候へき也。又さは候へとも、ちりはかりもかなひ候ぬへからん人には、阿彌陀ほとけ仏をすすめ、極樂をねかはすふへき也にて候そ。いかに申す候とも、この世の人の極樂にむまれ生死をはなれん事、念佛ならて極樂にむまるるぬ事は候ましき事にて候也。このあひたの事をは、人の心にしたかひて、はからふへきにすく候也。いかさまにも物を人とあらそふ事は、ゆめゆめ候ましき事に候。もしはそしり、もしは信せさらん物をは、ひさしく地獄にありて、又地獄へ返るへき物なりと、よくよく心えて、こわからて、こしらへすすむふへきにて候か。又よもとはおもひまいらせ候へとも、いかなる人申す候とも、念佛の御心なんと、たちろきおほしめす事あるましく候。たとひ千の佛世にいてて、念佛は往生すへからすと、まのあたりおしへさせ給ふとも、これは釋迦彌陀よりはしめて、恆沙のほとけの證誠せさせ給ふ事なれはとおほしめして、心さしを金剛よりもかたくして、このたひかならす阿彌陀ほとけの御まえへまいりんすりなんと、おほしめすへきにすく候也。かくのことの事、かたはしを申さんに、御心え候て、わかため人のために、おこなはせ給ふへし。あなかしこ、あなかしこ。

九月十八日　　勇勧人本源空

つのとの三郎殿御返事

つのとの三郎といふは武蔵国の住人也。おほこ、しのや、つのと、この三人は聖人根本の弟子なり。つのとは生年八十一にて自害してめてたく往生をとけたりけり。故聖人往生のとしとてしたりける。もし正月二十五日なとにてやありけむ。こまかにたつね記すへし。

黒田の聖人へつかはす御文〔黒田の聖へ遣はす書〕

末代の衆生を往生極樂の機にあててみるに、行すくなしとてうたかふへからす、一念十念にたりぬへし。罪人なりとてうたかふへからす、罪根ふかきをもきらはす**といへり**。時くたれりとてうたかふへからす、法滅已後の衆生なを往生すへし、いはんやこのころをや。わか身わ**る**しとてうたかふへからす、自身はこれ煩悩**を**具足せる凡夫なりといへり。

十方に淨土おほけれとも、西方をねかふは十惡五逆の衆生もむまるる**か**ゆへ也。諸佛の中に彌陀に歸したてまつるは、三念五念にいたるまてみつからきたりてむかへ給ふかゆへ也**に**。諸衆**仏**の中に念佛をもちゐるは、かのほとけの本願なるかゆへ也**に**。

いま彌陀の本願に乘して往生せ**な**んには、願として成せすといふ事あるへからす。本願に乘する事は、たた信心のふかきによるへし。

うけかたき人身をうけて、あひかたき本願にあひ**たまうあひ**、おこしかたき道心をおこして、はなれかたき輪廻のさとをはなれて、むまれかたき淨土に往生せん事は、よろこひかのなかのよろこひ也。

つみをは十惡五逆のものなをむまると信して、小**少**罪をもおかさしとおもふへし。罪人なをむまる、いかにいはんや善人をや。行は一念十念むなしからすと信して、无間に修すへし。一念なをむまる、いかにいはんや多念をや。

阿彌陀**仏**は不取正覺の**御**詞成就して、現にかのくににましませは、さためていのちおはらん時**命終**には、來迎し給はんすらん。釋尊はよきかなや、わかおしへにしたかひて、生死をはなれんとすれは知見し給ふらんはん。六方**の**諸佛はよろこはしきかな、われらか證誠を信して、不退の淨土に往生せんとすれは、よろこひ給ふらんは。

天は**を**あふき地にふしてもよろこひ**ひひひふへし**、このたひ彌陀の本願に**まう**あへる事を。行住坐臥にも報すへし、かのほとけの恩德を。たのみてもなをたのむへきは乃至十念の誡**御言**。信してもなを信すへきは必得往生の文なり。

黒谷聖人源空

越中國光明房へつかはす御返事〔光明房に答ふる書〕

又故聖人の御坊の御消息

一念往生の義は京中にもほほ流布するよしうけ給はるところ也。お**ほ**よそ言語道斷の事也。ま事にほとは**お**と御問にもおよふへからさる事歟**なり**。

**詮するところ**、雙卷經の中**下**には乃至一念信心歡喜といひ、又善導和尚の疏には上一形を盡し下一聲にいたるまてもさためて往生す

る事をうと信じて、乃至十念もうたがふ心なかれ**上尽一形下至十声一声等　定得往生乃至一念無有疑心**といへる。これらの文をあしく料簡するそ**みたる**ともからの、かかる大邪見に住して申候ところ也。乃至といひ下至といへるは、**みな**上み**上尽**一形をつくすをかねたる詞也。しかるをはのちかころの愚癡无智のともからの、おほくひとえに十念一念なりと執して、上盡一形をすつる**廃する**條、无慚无愧の事也。ま事に十念一念までも、ほとけの大悲本願なをかならす引接し給ふ无上の功徳なりと信して、一期不退に行すへき也。文證おほしといへとも、これを出すにおよはす。不足書の**いふにたらさる**事也。

ここにかの邪見の人、この難をうけて**かふりて**答へていはく、わかいふところも信を一念にとりて念すへき也。しかりとかて、又念佛すへからすとはいはすと云云**いふ**。**これまた**ことはは尋常なるにたれ**りといえ**とも、心は邪見をはなれす。しかるゆへは、決定の信心をもて一念してのちは、又念せすといふ**とも**十悪五逆なをさわりをなさす、いはんや餘の小**少**罪をやと信すへき也といふ。このおもひに住せん物は、たとひ多**おほく**念すといふともはむ、あにはとけ**阿弥陀仏**の御心にかなはんや。いつれの經論のいかなる**人師の**説そや。これひとへに懈怠无道心のいたり、不當不善のたくひの、ほしまいままに悪をつくらんとおもひていふ事なり。

又念せすはその悪かの勝因をさへて、むしろ三途におちさらんや。かの一生造悪のものの臨終に十念して往生するは、これ懺悔念佛のちから也。この悪**の**義には混亂すへからす。かれは懺悔の人也、これは邪見の人也。なをなを不可説**不可説**の事也。

たとひ**もし**精進のものなありといふとも、この義をきかはかならす**すなわち**懈怠になりなん。まれに持戒の人**戒をたもつ人**ありといふとも、この説を信せは、すなはち无慚になりぬへし。おほよそかくのときの人は、附佛法の外道也、師子の**みの**中のむし也。又うたがふらくは、天魔破旬のために、その正解**精進の気**をうはは れたるるともからの、もろもろの往生の人をさまたけんとするかなり。もともあやしむへし、ふかくおそるへ**しきものなり**。ととと**毎事**筆端につくしかたし。あなかしこあなかしこ**謹言**。

**これは越中国に光明房と申ひしり、成覚房か弟子等、一念の義をたてて念仏の数返をととめむと申て消息をもてわさと申候御返事をとりて国の人人にみせむとて申候あひた、かくのことくの御返事候き。**

**正如房へつかはす御文〔正如房へ遣はす書〕**

正如房の御事こそ返々あさましく候へ。そののちは心ならすうときやうになりまいらせ候て、念佛の御信もいかかと、ゆかしくおもひまいらせ候つれとも、さしたる事も候はす。又申すへきたよりも候はぬやうにて、思なからなにとなく**て**むなしくまかりすき候つるに、たたれいならぬ御事、大事になれとはかりうけ給はり候はんたにも、いま一度**は**みまいらせたく、おはりまての御念佛の事も、おほつかなくこそおもひまいらせ候へきに、まして御心にかけて、つねに御たつね候らんこそ、ま事にあはれにも心くるしくも、おもひまいらせ候へ。左右なくうけ給はり候ままに、まいり候てみまいらせたく候へとも、思ひきりてしはしゐてありき候はて、念佛申候ははやと思ひはしめたる

事の候を、様にこそよる事にて候へ。これをは退してもまいるへきにて候に、又思ひ候へは、詮してはこの世の見參**は**とてもかくても候なん、屍ねを執するまとひにもなり候ぬへし。たれとてもとまりはつへき身にて**て**も候はす。われも人もたおくれさきたつかわりめはかりにてこそ候へ。そのたえまを思ひ候も、又いつまてそ**か**とさためなきうへに、たとひ久しと申候とも、ゆめまほろしいく程かは候へきなれは、たたかまえてかまえておなし佛の國にまいりあひて、はちすの上にてこの世のいふせさをもはるけ、ともに過去の因縁をもかたり、たかひに未來の化道をもたすけん事こそ、返々も詮にて候へきと、はしめよりも申おき候しか、返々も本願をとりつめまいらせて、一念もうたかふ御心なく、十一聲も南無阿彌陀佛と申せは、わか身はたとひいかに罪ふかくとも、ほとけの願力によりて一定往生するそとおほしめして、よくよく一すちに念佛の候へき也。

　われらか往生は、ゆめゆめわか身のよ**しき**あしきにはより候まし。ひとへにほとけの御ちからはかりにて候へき也。わかちからはかりにては、いかにめてたく貴とき人と申すとも、末法のこのころ、たたちに淨土にむまるる程の事はありかたくそ候へき。又佛の御ちからにて候はんには、いかに罪ふかくおろかにつたなき身なりとも、それにはより候まし。たた佛の願力を信し信せさせ**ぬ**にそより候へき。されは觀无量壽經にとかれて候は、むまれてよりこのかた、念佛一遍も申さす、それならぬ善根もつやつや**と**なくて、あさゆふもの**を**ころしぬすみし、かくのことときのもろもろのつみをのみつくりてとし月をゆけとも、一念も懺悔の心もなくて、あかしくらしたるものの、おはりの時に善知識のすすむるにあひて、たた一聲南無阿彌陀佛と申したるによりて、五十億劫かの**の**あひた生死にめくるへき罪を滅して、化佛菩薩三尊の來迎にあつかりて、**汝**佛の**み**名をとなふるかゆえに罪滅せり、われきたりてなんちをむかふとほめられまいらせて、すなはちかの國に往生すと候。又五逆罪と申**候**て現身に父をころし、母をころし、惡心をもて佛をころし、諸宋**僧**を破し、かくのことくおもきつみをつくりて、一念懺悔の心もなからん、そのつみによりて无間地獄におちて、おほくの劫をおくりて苦をうくへからん物**の**、おはりの時に善知識のすすめによりて、南無阿彌陀佛と十聲となふるに、一聲**こと**におのおの八十億劫かの**の**あひた生死にめくるへき罪を滅して、往生すととかれて候めれは、さほとの罪人たにもたた十聲一聲の念佛にて往生はし候へ。**は**、ま事に佛の本願のちからならては、いかてかさる事候へきとおほへ候**て**。本願むなしからすといふ事は、これにても信しつへくこそ候へ。これはまさしき佛説にて候。佛の**のたまふ**御言はは一言もあやまりたすと申候へは、たたあふきても信すへきにて候。これをうたかはは、佛の御そら事と申すにもなりぬへく候。返りては又そのつみも候ぬへしとこそおほへ候へ。ふかく信せさせ給ふへく候。

　さて往生**は**せさせおはしますましき様にのみ申きかせまいらする人々の候らんこそ、返々あさましく心くるしく候へ。いかなる智者めてたき人々**と**おほせらるとも、それになおほとろかせ**され**おはしましき候そ。おのおののみちにはめてたく貴き人なりとも、さとりあらす行ことなる人の申候事は、往生淨土のためには、中々ゆゆしき退縁、惡知識とも申**候**ぬへき事ともにて候。たた凡夫のはからひをはききいれ

させおはしまさて、一すちに佛の御ちかひをたのみまいらせおはしまさせたまふへく候。さとりことなる人の往生いひさまたけんによりて、一念もうたかふ心あるへからすといふことはりは、善導和尚のよくよくこまかにおほせられおきたる事にて候也。たとひおほくのほとけそらの中にみちみちて、ひかりをはなち御したをのへて、悪をつくりたる凡夫なりとも、一念してかならす往生すといふ事は、ひか事そ信すへからすとの給ふとも、それによりて一念もうたかふ心あるへからす。そのゆへは、阿彌陀佛のいまた佛になり給はさりしむかし、はしめて道心をおこし給ひし時、われほとけになりたらんに、わか名号をとなふる事十聲一聲まてせん物、わかくににむまれすは、われほとけにならしとちかひ給ひたりし、その願むなしからす、すてに佛になり給へり。又釋迦佛この娑婆世界にいてて、一切衆生のためにかの本願をとき、念佛往生をすすめ給へり。又六方恆沙の諸佛この念佛して一定往生すと、釋迦佛のとき給へるは決定也、もろもろの衆生一念もうたかふへからす、ことことく一佛ものこらす、あらゆる諸佛みなことことく證誠し給へり。すてに阿彌陀佛は願にたて、釋迦佛はその願をとき、六方諸佛はその説を證誠し給へるうゑに、このほかにはなにほとけの又これらの諸佛にたかひて、凡夫往生せすとはの給ふへきそといふことはりをもて、佛現しての給ふともそれにおとろきて、信心をやふりうたかふ心あるへからす。いはんや菩薩たちのの給はんをや、況上辟支佛をやと、こまこまと善導は釋し給ひて候也。ましてこのころの凡夫のいかにも申候はんによりて、けにいかかあらんすらんなんと、不定におほしめす御心、ゆめゆめ候あるましく候。いかよにめてたき人と申すとも、善導和尚にまさりて往生の道をしりたらん事もかたく候。善導又凡夫にはあらす、阿彌陀佛の化身也。阿彌陀佛のわか本願ひろく衆生に往生せさせん料に、かりに人とむまれて善導とは申候也。そのおしへは申せは、佛説にてこそ候へ。あなかしこあなかしこ。うたかひおほしめすましきにてく候。

又はしめより佛の本願に信をおこさせおはしまして候し御心の程、見まいらせ候しに、なにしにかは往生はうたかひおほしめし候へき。經にとかれて候ことく、いまた往生の道もしらぬ人にとりての事には候。もとよりよくよくきこしめしたためて、そのうゑ御念佛功つもりたる事にて候はんには、かならす又臨終の善知識にあはせおはしまさすとも、往生は一定せさせおはしますへき事にてこそ候へ。中々あらぬさますちなる人はあしく候なん。たたいかならん人にても、尼女房なりとも、つねに御まへに候はん人に、念佛申させてきかせおはしまして、御心一つをつよくおほしめして、たた中々一向に凡夫の善知識をおほしめしすてて、佛を善知識にたのみまいらせさせ給ふへく候。もとよりほとけの來迎は、臨終正念のためにて候也。それを人のみなわか臨終正念にして念佛申たるに、佛はむかへ給ふとのみ心えて候は、佛の願を信せす、經の文を信せぬにて候也。**称讃浄土教の文を信せぬにて候也。**稱讃淨土經には慈悲をもてくわへたすけて、心をしてみたらしめ給はすととかれて候也。たたの時によくよく申をきたる念佛によりて、佛は來迎し給ふ時に、正念には住すと申すへきにて候也。たれも佛をたのむ心はすくなくして、よしなき凡夫の善知識をたのみて、さきの念佛をはむなしくおもひなして、臨終正念をのみいのる事とも

にて**のみ**候か、ゆゆしきひかゐんの事にて候也。これをよくよく御心えて、つねに御目をふさき、掌をあはせて、御心をしつめて、おほしめすへく候。ねかはくは阿彌陀佛**の**、本願あやまたす、臨終の時かならすわかまへに現して、慈悲をもてくわへたすけて、正念に住せしめ給へと、御心にもおほしめして、口にも申させ給ふへく候。これにすきたる事候まし。心よはくおほしめす事の**ゆめゆめ**候ましき也。

か様に念佛をかきこもりて申候はんなんとおもひ候も、ひとへにわか身一ゆのためとのみは、もとよりおもひ候はす。おりしもこの御事をかくうけ給はり候ぬれは、いまよりは一念ものこさす、ことことくその往生の御たすけになさんとこそ廻向しまいらせ候はんすれは、かまへてかまへておほしめすさまに逐させまいらせ候ははやとこそは、ふかく念しまいらせ候へ。もしこの心さしま事ならは、いかてか又御たすけにもならて候へき。たのみおほしめさるへきにて候。

おほかたは申いて候し一ことはに御心をととめさせおはします事も、この世一つの事にて**は**候はしと、さきの世もゆかしくあはれにこそおもひしらるる事にて候へは、うけ給はる事はり**候ことく**、このたひま事にさきたたせおはしますにても、又おもはすにさきたちまいらせ候事になるさためなさにて候とも、つゐに一佛淨土にまいりあひまいらせ候はん**こと**は、うたかひなくおほへ候。ゆめまほろしのこの世にて、いま一度なんとおもひ申候事は、とてもかくても候ひなん。これをは一すちにおほしめしすてて、ひたすら**いよいよ**もふかくねかふ御心をもまし、**御**念佛をもはけま**せ**おはしまして、かしこにてまたんとおほしめすへく候。返々もなをなを往生をうたかふ御心候まし候**きなり**。

五逆十惡のおもき罪つくりたる惡人、なを十聲一聲の念佛によりて、往生をし候はんに、まして罪つくらせおはします御事は、何事**に**か**は**候へき。たとひ候へきにても、いく程の事かは候へき。この經にとかれて候罪人には、いひくらふへくやは候。それにまつ心をおこし、出家をとけさせおはしまして、めてたき御のりにも緣をむすひ、時にしたかひ日に**たかひて**、**そえて**、善根のみこそはつもらせおはします事にて候ゆ**は**め。そのうゑふかく決定往生の法文を信して、一向專修の念佛にいりて、一すちに彌陀の本願をたのみて、ひさしくならせおはしまして候。何事にかは一事も往生をうたかひおほしめし候へき。專修の人は百人は百人なから、十人は十人なから往生すと、善導ゆの給ひて候へは、ひとりそのかすにもれさせおはしますへきかはとこそ**は**おほへ候へ。善導をもかこち、佛の本願をもせめまいらせさせ給ふへく候。心よはくは、ゆめゆめおほしめすましく候。あなかしこあなかしこ。

ことはりをや申ひらき候とおもひ候程に、よ**く**おほくなり候ひぬる。さやうのおりふし骨なくやとおほへ候へとも、もしさすかのひたる御事にても又候らん。えしり候はねは、このたひ申候はては、いつをか**は**まち候へき。もしのとかにきかせおはしまして、一念も御心をすすむるたよりにやなり候と、おもひ候はかりにととめえ候はて、これほと**も**こまかになり候ぬ。譏嫌をしり候はねは、はからひかたくてわひしくこそ候へ。もし无下によはくならせおはしましたる御事にて候はは、これは事なかく候へ候**きなり**。要をとりてつたへまいらせさせおはしますへく候。うけ給はり候ままに、なにとなくあはれにお

ほへ候て、おし返し又申候也。

**十二の問答〔或人念仏之不審聖人奉問次第〕**

問申、八宗九宗のほかに浄土宗**の名**をたつる事**は**、自由の條かなと**にまかせてたつること**餘宗の人の申候をは、いかゝか申し候へき。

答、宗の名をたつる事は佛の説**には**あらす。みつから心さすところの經教につきて、おしふる**存したる**義をさとり**学し**きわめて、宗の名**義**をは判する事也。諸宗の習みなもてかくのことし。いま浄土宗の名をたつる事は、浄土の正依**正**經につきて、往生極樂の義をさとりきわめておはしますたまへる先達の、宗の名をはたて給へる也。宗のおこりをしらさるものの、左様の事をは申候也。

問申、法華眞言等をは、雜行にはいるへからすと、人**ある**人の申候をはいかゝこたへ候へき**む**。

答、惠心**の**先德、一代**の**聖教の要文をあつめて、往生要集をつくり給へる中に、十門をたゝ**てて**。その第九の**に**往生**の**諸業**行の**門に、法華眞言等の諸大乘經をいれ給へり。諸行と雜行と、言は異にして心**は**おなし。いまの難者は惠心の先德にまさるへからさるもの也。**〈云々〉**

問申、餘佛餘經につきて善根を修せん人に、結緣助成し候はん事は雜行と申**にてや**候へきか。

答、わか心彌陀ほとけ**仏**の本願に乘し、決定往生の信をとるうゑには、他の善根に結緣**し**助成せん事はまたく雜行は**と**なるへからす。わか往生の助業となるへき也。他の善根を隨喜讃嘆せよと釋し給へるをもて、心うへき事也。

問申、極樂に九品の差別の候事は、阿彌陀ほとけのかまへさせ給へる事にて候やらん。

答、極樂の九品は彌陀の本願にあらす、四十八願の中にもなし。これは釋尊の巧言也。善人惡人一所にむまるゝといはは、惡業のものとも、慢心をおこすへきかゆへに、九品**品位**の差別をあらせて、善人は上品にすすみ惡人は下品にくたる**な**ととき給へ**るふ**也。いそきまゐ**か**りてみるへし。**〈云々〉**

問申、持戒の行者の念佛の數遍のすくなく候はんと、破戒の行人の念佛の數遍のおほく候はんと、往生ののちの位の淺深いつれかすすみ候へきや。

答、居てまします**おはします**疊をおさ**さ**へての給はく、この疊のあるにとりてこそ、やふれたるかやふれさるかといふ事はあれ。つやつや**と**なからんたたみをはなにとか**は**論すへき。末法の中には持戒もなく破戒もなし**無戒もなし**。たた名字の比丘はかりありと、傳教大師の末法燈明記にかき給へるうゑは、なにと持戒破戒の沙汰をはすへきそ。かかるひら凡夫のためにおこし給へる本願なれはとて、いそきいそき名號を稱すへし。**と〈云々〉**

問申、念佛の行者等日別の所作において、こゑをたてて申す人も候。又心に念してかすをとる人も候。いつれ**お**かよく候へき。

答、それは口にとなふるも名號**も名号をとなへ**、心にも念するも名號**も名号を念すること**なれは、いつれも往生の業**に**はなるへし。たたし佛の本願は**の**稱名の願なるかゆへに、聲をたてとなふ**あらわす**へき也。その**かるか**ゆへに經には令聲不絶具足十念**こえをたえす十**

念せよととき、釋には稱我名號下至十聲とのの釈し給へり。わか耳にきこゆる程おは高聲念佛にとる也。されはとて機嫌をしらす高聲なるへきにはあらす。地體は聲を出さんとおもふへき也。

問曰、日別の念佛の數遍は、相續にいる程は、いかんかはからひ候へき。

答、善導の御釋によるはらは、一萬已上は相續にて候あるへし。たたし一萬遍をもいそき申して　さてその日をくゆすこさん事はあるへからす。一萬遍なりとも、一日一夜の所作とすへきもし。惣しては一食のあひたに三度はかり思ひいたさんとなえむは、よき相續にてあるへし。それは衆生の根性不同なれは、一準准なるへからす。心さしたにもふかけれは、自然に相續はせらるる事也。

問曰、禮讃の深心の中には十聲一聲必得往生　乃至一念无有疑心と釋し給へり。又疏の中の深心の中には念念不捨者　是名正定之業と釋し給へり。いつれかわか分にはおもひさため候へき。

答、十聲一聲の釋は念佛を信する様なり、念念不捨者の釋は念佛を行する様也。かるかゆへに信をは一念にむまるととりて、行をは一形にをはけむへしとすすめ給へる釋也。又大意は一發心已後　輩畢此生无有退轉　唯以淨土爲期の釋を本とすへきもし。

問曰、本願の一念は、尋常の機にも、臨終の機にもともに通すへく候へきか。

答、一念の願は、いのちつまりて二念におよはさるらむ機のため也。尋常の機に通すへくは、上盡一形の釋あるへからす。この釋をもて心うるにへし、かならすしも一念を仏の本願といふへからす。念念不捨者　是名正定之業　順彼佛願故と釋し給へり。この釋は、數遍つもらんおも本願とはきこへたるは、たた本願にあふ機の遲速不同なれは、上盡一形下至一念とおこし給へる本願也と心うへき也。かるかゆへに、念佛往生の願とこそ善導は釋し給へと。

問曰、自力他力の事は、いかんか心えうへく候へきらむ。

答、源空は殿上へまいるへき器量にてはなけれとも、上よりめせは二度までまいりたりき。これはわかまいるへきしなきにてはなけれとも、上の御ちから也。まして阿彌陀ほとけの御ちから仏力にて、稱名の願にこたへて來迎せさせ給はん事おは、なんの不審かあるへき。わか身自身のつみのおもくて无智なれは、佛もいかにしてかすくひ給はんなんましまさんとおもはん物は、つやつや佛の願をもしらさる物也。かかる罪人ともを、やすやすとたすけすくはん料に、おこし給へる本願の名號をとなへなから、ちりはかりもうたがふ疑心かあるましき也。十方衆生のこころは願の中に有智无智、有罪无罪、善人惡人、持戒破戒、男子女人、三寶滅盡ののちの百歲までの衆生みなこもれる也。かの三寶滅盡の時の念佛者は、常時のわ御房達とくらふれは、當時のわ御房達は佛のことし。かの時の人のいのちはたた十歲は人寿十歲の時也。戒定慧の三學、たた名をたにもきかす。惣していふはかりなき物ともの、來迎にあつかるへき道理をしりなから、わか身のすてられまいらすへき様をは、いかにしてか案し出すへき。たたし極樂のねかはしくもなく、念佛の申されさらん事のみこそ、往生のさわりにてはあるへけれ。かるかゆへに他力の本願ともいひ、超世の悲願ともいふ也〈云々〉。

問曰、至誠等の三心を具し候へき様をは、いかゝかおもひさため候へき。

答、三心を具する事はたた別の様なし。阿彌陀ほとけの本願に、わか名號を稱念せはよかならす來迎せんと、おほせられたれは、決定して引接せられまいらせんするそとふかく信して、心に念ゝ口に稱するに物うからす、すてに往生したる心ちして、最後十念にいたるまてたゆまさるものは、自然に三心は具足する也。又在家の物ともは、それか程までにおもはされとも、たゝ念佛を申す物は、極樂にむまるなれはとて、やはり念佛をたにも申せは、そらに三心は具足する也。されはこそいふにかひなきものやからともの中にも、神妙なる往生をはする事にてあれと〈云々〉。

問曰、臨終の一念は百年の業にすくれたりと申すは、平生の念佛の中に、臨終の一念ほとの念佛をは申しいたし候ましく候やらん。

答、三心具足の念佛はをなし事也。そのゆへは、觀經にいはく具三心者必生彼國といへり。必文字のあるゆへに臨終の一念とおなし事也。

この問答の問をは、進行集には禪勝房の問といへり。ある文には隆寛律師の問といへり。たつぬへし。

（いちかわ　さだたか　仏教学科）

二〇一八年十月二十五日受理